一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO. 48（2023 年 8 月 31 日発行）

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発　行：（一社）東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602　沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部　小西研究室気付
http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第 80 回定例研究会記録】

日時：2023 年 7 月 16 日（日）10:00～12:00
オンライン開催（Web 会議ツール Zoom）

研究発表　山本佳穂（東日本支部）

「琉球舞踊における女性地謡の採用状況とその背景」

■発表要旨

本発表は、女性による歌三線演奏について、琉球舞踊の地謡としての一面に着目し、その実態の一端を明らかにするとともに、女性による地謡がどのように捉えられているのかを考察したものである。

琉球古典音楽における歌三線は、琉球王国時代に首里城内で役人によって演奏されていた「男性の音楽」であるため、女性が演奏する際に種々の問題が生じやすい。このような背景を出発点に、本発表では女性による地謡に焦点を当て、女性地謡がどの演目にどの程度採用されているのか、過去に行われた公演のプログラムを用いて概観した。同時に、女性奏者に指導を行う立場の男性歌三線奏者、及び女性による地謡で舞踊を披露する琉球舞踊家に直接お話を伺い、女性による地謡の現状や諸課題の一端を明らかにした。

女性地謡は女踊、雑踊、二才踊の順に採用されやすいものの、全体的には女性が地謡に採用されにくい傾向がある。また、同じ曲種の中でも女性地謡の採用には偏りがある可能性を指摘した。その背景には、曲想や音楽的特徴だけでなく、いわゆる「難曲」「大曲」という人々の認識も関わっていると考えられる。

以上を念頭に、今年 6 月に実施したインタビューを取り上げた。ご協力いただいたのは、歌三線奏者の花城英樹氏、照喜名朝國氏（ともに琉球古典音楽安冨祖流絃声会師範）、琉球舞踊家の佐辺良和氏（琉球舞踊世舞流二代目家元）である。

3 名へのインタビューから、解決すべき大きな問題として、①女性の活躍の場の増加、②聴き手の違和感の解消の 2 点が浮かび上がった。この 2 点については、違和感を解消するために女性の活躍の場を増やす、そのために女性による歌三線演奏への違和感を解消する、というように、両輪で取り組む必要がある。

また、女性の声が男性よりも細いと捉えられがちであることを逆手に取り、繊細な表現が求められる演目に取り組んできた一方で、二才踊などの勇壮さを求められる演目には向かないとされることが多い。しかし実際には、男性であることよりも必要な技術と力強さを表現するのに適している声を持っていることの方が重要ではないかと指摘された。

同時に、照喜名氏からは「女性による演奏その

ものについて議論されるようになったのはここ20年ほど」という指摘があったが、言い換えれば、この 20 年は女性による歌三線演奏が琉球音楽のあり方として認められたが故に、その内容を向上させていかなければならないという問題意識が生まれた時代と言えるだろう。

以上を踏まえ、今後は女性による地謡、ひいては女性の歌三線演奏全体の広がりに尽力した人物や彼らの関係者、及び地謡・独演会開催経験のある女性奏者などへの聞き取り調査を行うとともに、野村流と安冨祖流の女性進出状況の比較や楽曲分析の充実を図り、女性による歌三線演奏の実相をより鮮明にしていきたい。また、組踊地謡にも調査範囲を広げ、女性歌三線奏者と舞踊家及び立方、聴衆の複雑化していく関係について検討する必要があると考えている。

（山本佳穂氏の発表）

■傍聴記

本発表は、発表者が修士論文において行なってきた女性地謡を取り巻く状況の考察結果、すなわち①社会的な環境や制度、②琉球古典音楽の音楽的特徴、③三線および舞踊実演家の認識の３点から得られた知見をもとに、新たな研究の出発点とするものである。研究の展望では、本土の芸能実践状況や沖縄の舞踊、組踊といった近接領域からの視点、生物学的性・社会的性としての女性をも包含した視点をもって研究を行う予定であることが示された。

さて、本発表内容の琉球古典音楽における「女性地謡の採用状況」については、2023 年 6 月初旬に発表者が実施した聞き取り調査、主に安冨祖流絃聲会師範花城英樹氏、同照喜名朝國氏、琉球舞踊世舞流二代目家元佐辺良和氏といった 40 代から 50 代の女性への地謡指導経験者と、女性の地謡で舞った経験のある舞踊家への言説を軸に詳らかにしようとする試みだった。

詳細は発表要旨に譲るが、質疑応答では寺園氏（非会員）から、３名を選出した根拠について確認があった。発表者は、すでに修士論文にて女性地謡からの聞き取りを行なっていたことを踏まえ、安冨祖流関東支部の女性地謡部会による「真南風の会」の関係者等へ注目したかったと回答があった。続けて三島氏から、演奏会はコンセプトが定められた上で実施されるもので、そこから女性の選出が行われるのではないかと、前提となる演奏会そのものの性質の分類について見解を求める質問があった。

また、永原氏からは、「女性の声」が持つ特徴ゆえに「男性の声」が果たせない役割があるのか、加えて「女性の声」について、どのような基準、測り方、評価方法で分析を行おうとしているのか質問があった。発表者は、すでに「女性の声」がどのように形容されているかを聞き取り等による言説から集めていて、「男性の声」への形容との差異についても説明があった。また、性差による音楽的な評価が、これまでに形容されてきた言説の印象と相まって、正しい評価がなされてきているのか疑問があることも付け加えられた。発表者は、女性が歌いにくいとされる節については、楽曲分析から女性でも歌うことが十分に可能であることを示してみたいと回答があった。

本発表では３名の聞き取り対象者の言説を中心に分析していたが、それを近年の演奏会に対してどのように反映していくのか、期待と違和感が残った。演奏会は、多様な意図を持って実施されている場合が多く、出演者の選出に関わる人物の世代や指向は年代によってかなり異なっていることは容易に想像できる。三島氏が指摘した演奏会の性質分類と同様に、監修者（あるいは選出者責任者）が誰なのか、どのような人物に任されてきたのか等も追うことで、今回の３名の言説に辿り着

くまでの時代変遷、流派の傾向なども見えてくるかもしれない。今後、演目と奏者をクロスした分析からさらに踏み込むことで、琉球古典音楽そのものの演奏史を眺めることができるのではないかと、期待したい。
（報告：遠藤美奈）

講演　登壇者：コロンえりか（非会員、ホワイトハンドコーラス NIPPON 芸術監督）
コーディネーター：小西潤子（沖縄支部）

「ホワイトハンドコーラスの沖縄での活動と展望」

■発表概要
コロンえりか氏は、教育者、声楽家として舞台に立つ中で、耳が不自由な人々といかに音楽の喜びを分かちあえるかを考えていたところ、ベネズエラのホワイトハンドコーラスと出会った。ベネズエラでは、1975 年からエルシステマという無償の音楽プログラムがあり、音楽教育を通じて貧困、暴力から子どもたちを救い、居場所を与え社会性を学ぶ場となっている。現在では、70 以上の国と地域に広がっているが、ホワイトハンドコーラスの活動は、ベネズエラと日本のみである。
ベネズエラのホワイトハンドコーラスを短い映像で紹介した後、「多様な人材が集まっている状態」のダイバーシティと「多様な人が対等に関わりあう」インクルージョンの概念との違いについて論じた。また、日本では中学生の半数以上が障がい者と関わったことがないというアンケート結果があるのに対して、障がい者権利条約（2006 年国連採択）では「障がいは個人にではなく社会にある」という考え方があること、日本における分断された教育現場が偏見を生んでいるという国連人権委員会の勧告を紹介し、分断が創造とイノベーションの阻害や生きづらさを生みだしていると指摘した。
ホワイトハンドコーラス沖縄は、2022 年 9 月にエルシステマ・コネクトの沖縄チームとして発足し、2023 年 1 月に任意団体として独立したばかりで、沖縄市と那覇市を活動場所とし、障がいの有無に関わらず 6 歳の子どもから 20 歳が無償で参加できる。毎週日曜日、手話と音楽のレッスンを受け、年に数回一般公開の公演を行い、地域を超えた交流活動を行っている。
ホワイトハンドコーラス NIPPON としては、沖縄では豊かな音楽文化にろう者や難聴の子どもたちがアクセスできているか、合唱団のインクルーシブは実現できているか、地域との連携により活動の持続性、コミュニティの活性化ができないか、という課題に着眼しており、ホワイトハンドコーラス沖縄は、対話型のアプローチ、日本手話と沖縄ろう文化の継承、プロとのコラボレーションにより、子ども、アーティスト、社会をつなぐ活動をしている。たとえば、沖縄民謡≪月ぬ美しゃ≫の演奏では、70～80 代の方が使う「うちなーぐち」の手話をとりいれていることを公演のリハーサル映像によって紹介した。
また、ホワイトハンドコーラス NIPPON による写真家とのコラボレーション、NHK 教育テレビ「おかあさんといっしょ」の手話バージョン制作、新国立劇場オペラ Super Angels といった活動を通じて、主体である子どもたちとアーティスト、サポーターの間のコミュニケーションがうまくいくほど、社会へのインパクトが大きくなると考えていること、音楽は耳で聴くだけのものではないという持論を展開した。
さらに、沖縄県における手話言語条例、ホワイトハンドコーラス NIKPPON の地域を超えた子どもと大人の月一度のオンラインによる「ポッシボ会議」、来年、80 人の子どもたちがウィーンで≪第九≫を披露する企画について触れた。
（報告：小西潤子）

（コロンえりか氏の発表）

■傍聴記

冒頭に、小西潤子沖縄支部長がコーディネーターとして、この講演の主旨を説明し、社会に関わる民族音楽学として、「応用民族音楽学」という研究の視点を提示された。今回の講演では、ベネズエラ生まれで、インクルーシブな合唱活動を行なうホワイトハンドコーラス NIPPON の芸術監督を務めておられるコロンえりか氏に、沖縄での活動をご紹介いただき、その課題と展望について共に考える機会を得た。

ホワイトハンドコーラスは、コロン氏によればベネズエラと日本にのみ存在する合唱のあり方で、とくに聴覚に障がいのある子どもたちなどが白い手袋をはめて、手話に訳された歌の言葉を、自分たちの言葉である手話によって伝え、声を出して歌える人たちと一緒に演奏つまり合唱をする活動であるとのことであった。基本的に声だけによる演奏行為である合唱だが、ここでは声とは別の、パートの音それ自体は鳴り響かない手話という身体表現が用いられる。そのことで、言葉や音の身振りが視覚化され、独立したパートとなって、声やピアノなどの楽器の音とアンサンブルすることになる。これは、いわばポリテクスチュアルな演奏への変換と言えよう。

沖縄で展開されているホワイトハンドコーラスでは、標準語の日本手話だけでなく、沖縄のウチナー手話を用いることで、沖縄の音楽文化の中で継承された音楽を表現することも試みられているとのことであった。また、地域との連携による活動の持続性や、地域のコミュニティの活性化への貢献などの課題があるとのことで、その点は伝統芸能の継承と維持における、財政的な支援や自治体との協力関係とも関連すると言えよう。

インクルーシブ、あるいはインクルージョンという言葉や概念と、このホワイトハンドコーラスの活動とが実践的に関わっているのは言うまでもないが、この活動が単なるダイバーシティの実現ではなく、様々な障がいを持つ／持たない人びとが相互に関わり合いながら多様に機能していることを、具体的な音楽活動や芸術活動によって実現している事例として理解できた。とりわけ、プロの音楽家や芸術家などが加わることは、活動の質だけでなく参加者との緊張関係を形成する上で重要なことと思われた。

最後に、質疑応答で、視覚障がいの方が、障がいは「個人」にあるのではなく「社会」にある、という標語に対して、障がいは一人ひとりにある、と指摘されたことは真摯に受けとめたい。筆者は合唱という行為について、個々人の異なった声の差異を現実の差異として受け入れることである、と考えている。社会という、あるいは合唱団という組織のなかで、その差異を概念化して共有するのではなく、現実あるいは事実としての差異を生かすのが、音組織としての音楽の諸要素であると考えている。願わくば、このホワイトハンドコーラスが、障がいという状態を、マイナスでもプラスでもないごく普通の事実としての差異という新たな状態へと、音楽の力、合唱の力によって転じ、インクルージョンの活動をさらに展開されることができるように、今後を期待したい。

（報告：永原恵三）

～沖縄支部からのお知らせ～

◇定例研究会について

これからの開催については、第 81 回定例研究会　2024 年 2 月 18 日（日）14 時～16 時　Zoom によるオンライン開催を予定しています。発表希望者を随時受け付けております。また、他支部会員の発表も歓迎致します。発表を希望される場合には、沖縄支部事務局までご連絡ください。

沖縄支部事務局：
〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

メールでのエントリー締切日は、2023 年 12 月 15 日（金）17 時、郵送の場合は同日必着です。応募状況によっては、第 82 回例会（2024 年 6 月頃予定）での発表となる可能性をお含みおきください。

定例研究会の詳しい内容は、決まり次第、学会ホームページに掲載します。また、学会員以外の方々も聴講可能ですので、奮ってご参加ください。

（一社）東洋音楽学会 沖縄支部通信 No. 48 編集委員
小川恵祐、高瀬澄子、多和田真理
塚原健太、三島わかな
次号 No. 49 は 2024 年 3 月に発行予定